

令和6年9月

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「失言」

そそっかしい私は、来客を知らせるベルに、急ぎ玄関へ出ようとして敷居に躓いてしまった。信じられないような高さに飛び跳ねて、天井から逆さまに落ちるような鋭角で落ちてしまった。起きようとしたが、右手がぶらんと下がったまま。

騒ぎに気付いて息子が二階から下りて来た。玄関を開けると、来客は、たまたま元看護師の方だった。すぐにタオル二枚を結んで腕を固定してくれ、そのまま息子の車で病院に行った。

まず検査を受け、すぐ手術となったが、承諾書を書くにも右手が使えない。息子に書いてもらったものの左利きのため、字はなんとも下手である。生前、夫が「左利きでは字は上手にならん。字が下手だと馬鹿に見える。絶対直せ」と言っていた。この訓示を守らなかったばかりにと言い訳をしたら、若い外科医の先生はニヤリとされた。

次に、先生が書類に署名されるのを見ていたら、なんと左利きだった。私は「しまった！ どうしよう」と思い、自分の膝で横に座っている息子の膝に合図をしたが、先生に気付かれて、またもやニヤリと笑われてしまった。

その左利きの先生に、四時間半をかけて右肩の粉碎した骨を繋いでいただき、肩から肘にかけては人工骨を入れていただいた。

麻酔が覚めた時、先生はベッドの側の椅子に疲れ切ったお顔で座っておられ、私を心配そうに見てくださっていた。手術は二時間半の予定であったが四時間半かかり、終わったのは夜の十時半だった。大変な手術だったのである。息子も手術室の前でずっと待っていてくれた。ずいぶん心配をかけてしまったと、心の中で息子に何遍も謝った。何より先生に申し訳なくて仕方なかった。左利

きでも立派な外科医になれるんだと。そして、右手を骨折して、左利きの人が羨ましくなった。

野茨(いばら)や人罵(ののし)れば罰がくる

久子

「戦中戦後を生き延びて」

敗戦日、つまり終戦日、昭和二十年八月十五日、天皇陛下の御言葉を賜るので、皆ラジオの前に集まりなさいと言われ、家族全員ラジオの前に正座した。祖父は紗の紋入りの羽織に白扇子を持ち、ラジオに深々と頭を下げた。

やがて、ラジオから重々しい陛下の御声が流れて来た。そして、いきなり祖父が「降伏だ」と叫んだ。小学生の私は「降伏」の意味が判らず「幸福」になることだ、と思って弟とふざけていたら、いきなり扇子でぴしゃりと頭を叩かれてしまった。どうして大人達が泣いているのかも判らなかった。後で文字を書いて説明された時には、恥ずかしくてその場に居られなかった。

然し、戦争が終わったことには、子どもながらにほっとしたことを覚えている。

終戦の日なり平和の日なりけり

久子

「ひもじかった子等」

戦時下には、菓子類を口にすることがなかった。菓子店には売る物がなく、飴の包み紙を子ども等に売っていた。誰が教えたのか折紙の様に折り継ぎ、一本のベルトを作って腰に巻き、お洒落をしたつもりになるのが流行ったものだ。その頃、諸飴が配給

になり、アルミの弁当箱を持って列に加わった。三本だけだったが姉妹で分け合い、その甘かったことは忘れられない思い出となっている。

昨今は飴なんか舐めたら虫歯になると、迂闊に人様の子にあげられない。そうそう、戦時下には、虫歯の人が居なかった。

鬼灯を鳴らし合うた子今何処 久子

「継ぎ接ぎズボンの子等」

昔は、膝当て尻当ての継ぎのあるズボンは子ども達の定番で、女達は繕い物で夜なべをした。昨今は継ぎのある服を着た子どもを見たことがないし、「捨てることが片付け上手」なのだという。しかし、戦時下育ちの婆の口癖は、「勿体ない」。昔からの習慣で、靴下でも下着でも継ぎをして満足。端布をつないでは袋物にする。捨てられないもの多くて、ゴミ御殿に色々な物が鎮座している。

Gパンにわざわざ隙間風作り 久子

「機(はた)音のする町」

茨城県結城郡石下(いしげ)町は、町の中央を南北に鬼怒川が貫通する。終日、機音のする横丁を抜けると肥沃な田や桑畑が広がり、その真ん中に筑波山がどっかと座っている。酒、醤油の醸造が盛んで、太い糸で織った縄(あしぎぬ)の結城紬は「石下紬」と呼ばれた。戦争に使った落下傘(パラシュート)も織られた。蚕棚の下に寝る農家の人々、戦時中の桑摘み勤労奉仕団、地元の方言、どれもが懐かしい。

桑の実に口赤くして疎開の子 久子